

ひがしまち街角広場の挑戦

～居場所作り～

赤井直

(あかい すなお)

ひがしまち街角広場運営委員長ほか

「ただいま、お水ちょうだい」「お帰りなさい、あら今日は遠足だったの、暑かったからね」「うん、水筒が空っぽや。」「ひがしまち街角」での午後のワンシーンです。

開設の経緯

1999年(平成11年)に経済対策閣僚会議決定により位置付けられた、「歩いて暮らせる街づくり構想」のモデルプロジェクト推進事業として指定を受けた事がはじまりです。2000年(同12年)に新千里東町の住民代表と行政、学識経験者などの参加で調査検討委員会が組織されました。住民を対象にアンケート、ヒヤリング、ワークショップなどから「住民の視点からの構想づくり」で7つの提案を行い、その一つであった「近隣センターを生活サービスと交流の拠点にしよう」の実現に向け、行政が近隣センター(商店街)の空き店舗を『場所』として確保しました。社会実験として住民が6ヶ月間運営を任されました。

まずは実践とこころえ『開設すれば日々の運営の中から自ずと道が見えてくる』を信じて「地域交流の場が確保された」ことだけを以って9月10日発起人会と実行委員会設立を呼びかけました。「歩いて暮らせる町づくり」時の調査検討委員のメンバーと地元住民が参加し25名以上の実行委員が集まりました。第一回実行委員会は9月

20日に開催し、開設を9月30日(日)と決定し、スタッフに予定した主婦が活動し易い時間帯の午前11時から午後4時までになりました。第二回は当面の運営と利用プランについて検討し、並行して『場所』の仕上げを慌しくやりました。開設当初は物珍しさも手伝って多くの人が来ましたが、いつまでもその盛況が続きます。

社会実験期限の6ヶ月が迫ってきました。来訪者から「このまま続ける事は出来ないか」との要望が多く、豊中市に相談しました。「地域で責任を持って運営していくのであれば」と回答を得ました。家主との契約は改めて実行委員会で行う事になりました。「地域で自主運営をしていこう。もしこの6ヶ月の実績が幻であったとすれば地域として必要ない『場所』だと解釈し潔く閉じる」と決意し、2002年3月1日から発展的再出発として自主運営を決定。2004年10月に三周年を迎えました。

日々の様子

住民同士の交流が主な目的です。喫茶スペースの提供、イベント、会議への貸し出しも行っています。子ども達は学校帰りに立ち寄って地域の大人と言葉を交わします。

「街角広場」での活動は来訪者への飲み物(コーヒー・紅茶・日本茶・水他)の提供と“おしゃべり”です。

しかしこの“おしゃべり”がとても大事だと気付きました。ふらっと寄れることが一人で家にいる人にとっては何より大切に、此処で何気ない時間を過ごすことで、安心に繋がったりします。他人の会話を聞くことで、我が身と重ね、連帯感をもち、知らないもの同士が友達になれるのです。ここ『街角』で新しいお友達が出来た人はたくさんいます。お互いに顔も知らず何年も近所に住んできたのが「ニュータウン」ではよくあったことでした。

開設当初のエピソードと毎日のこと

・60歳定年を迎えて間もない人の話

サラリーマンをしていて近隣にさしたる知り合いもなく、定年後は奥さんについて地域デビューをしようと考えていた矢先、定年少し前に奥さんに先立たれ途方にくれていた人が『街角』で友達が出来、地域でサークルなどに参加し、生き生きと生活が出来るようになりました。

・一人暮らしの人

独居の人はたくさんいますが、この人は毎日お見えになります。あまり口も利かずただニコニコと座って話を聞いているだけでした。ご病気の様子で、スタッフは気をつけていました。この日はいつもと様子が違っていました。とうとう座っていられなくなり意識がしっかりしていません。椅子を並べて寝かせ救急車への連絡と同時に担当民生委員と介護センターに連絡、病院に搬送しました。その後1ヶ月ぐらいで退院した時、民生委員から「無事本日退院しました」と連絡を受けましたが、その時はもう『街角』にパジャマ姿のまま座っていました。

・助けを求めて

若い女性がある日お湯をくださいと入ってきました。精神面で追い詰められ、話しかけようとしたのですが興

奮状態でどうにも出来ません。黙って持ってきた小さな鍋にお湯を入れて渡しました。日が経つにつれ、話が出るようになり、職を失って電気もガスも使えないと知りました。冬の寒い時でした。しばらく続きましたが「就職が決まりました、お世話になりました」と報告をいただきました。今でも元気な姿を見て安心しています。

・毎日のこと

人々の居場所としての『街角』では明るく楽しい事も、少し悲しい心配な出来事も経験豊富なスタッフ達が適切な対応をしているので、多くの共感を得ています。子どもが自分自身の悩みを言ったり、家庭のことを話したりします。そんな時、そっと応えてやる事でそれなりに元気をとり戻すのを見るとホッとすることがあります。

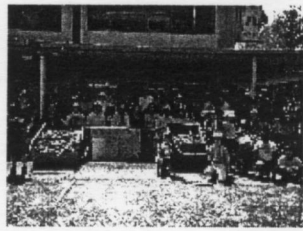
奥様を介護されているご主人が、『街角』でコーヒーを飲みながら手馴れない料理の方法を教わり、夕食が出来上がります。時々、車椅子を押してご一緒に来られます。ご主人の買い物の間、奥様は『街角』で皆とお茶をしています。人との意思疎通はあまり出来ませんが、安心した様子で、さながら「ミニミニデイサービス」です。

無い様でルールと不文律は自然に出来ています。「人権・プライバシーに関わる事」「政治活動について」「宗教活動について」などは話題にしない。此処での話は無責任に他所でしないなどです。あたりまえのことですがお互い上手にお付き合い出来る環境が出来ています。

生まれたもの

春には「タケノコ掘り」を豊中市に許可申請し、地元の竹林で毎年行っています。ある参加者が竹林の状態に不安を抱き、豊中市と交渉の結果、竹林の手入れが許可され、「千里竹の会」が生まれました。間伐材の竹を使

っての竹細工は「子ども居場所づくり事業、東丘子ども教室」で人気があります（写真：掘り出したタケノコ）。



インテリアと住民の発表の場を兼ねて、絵、写真、手芸などを展示しています。この展示をみて、作ってみたい、教えてほしいと希望があり写真サークル「あじさい」が発しました。例会時には自信作と展示替えをしています。

手作りも随時教えあって輪が広がっています。

当初から関わっている大阪大学建築工学専攻グループの発案で千里の風景を絵葉書にと「千里グッズの会」が出来ました。この絵葉書は『街角』で販売しています。

子どもからも希望が出ました。アニメ「ヒカルの碁」人気で、囲碁をしてみたい、習いたいと申し出がありました。「子ども囲碁サークル」が生まれ、囲碁の先生を子ども達は「師匠」と呼び、日常の世代間交流が出来ています。

季節を実感して

忘れられつつある風物詩はたくさんあります。『タケノコ掘り』もその一つですが、家庭ではみられなくなった懐かしい事をやってみよう、楽しんでみようど・・・

・七夕飾り

竹林の大きな竹と短冊を用意しています。子どもはもちろん、高齢者も懐かしいと言いながら「願い事」を短冊にしたためています。夜はお勤め帰りの人たちが書くのでしょう「仕事が上手くいきますように」などが見られ、暗くなってからの様子が想像できます。

・落ち葉遊び

『街角』の前にケヤキがあり秋には落ち葉でいっぱい



になります。ビニールプールで「落ち葉プール」を作ります（写真）。子ども達がうれしそうに落ち葉にくるまっています。

こぼれて減ると自分達で集めて戻し数日間楽しめます。最後は腐葉土となり校庭にある畑の肥料になります。

・干し柿

到来物の柿を竹に吊るし干し柿を作ります。子どもが散歩に来て、珍しそうに眺めています。みんなで味見をすると、『街角』の干し柿は一段とおいしく感じます。

・しめ縄作り

農家から藁が届き、しめ縄教室を12月に開いています。懐かしいと昔とった杵柄の人、初めてだけど、と教えてもらいながら創作意欲旺盛な人、又数人がかりで大きなしめ飾りを作る人など様々に、迎春の準備を行います。『街角』のしめ飾りも出来上がってきます。

来訪者の希望で

「コーヒーのお供に何か」と希望がありました。市販のお菓子では意味がありません。障害者授産施設の製品を置いてみました。説明付きの紹介で人気になり、在庫がなくなると「何時来るの？」と催促が出ます。お遣い物にしたいと予約もあり、施設からも感謝されています。

記念行事

開設して一周年を迎えた時、地域の皆さんと共に大切に育てた『街角』で何か記念になることを、と考えました。少しずつの蓄積を地域に還元する目的で、立食パーティーも含め多角的な内容で記念イベントを開催したと

トマニエミロを出品するは大人

～るべきも田舎も見違のち～

ころ、好評をいただきました(写真下：イベント報告紙)。

大阪大学の学生、院生による課題を持つての発表と地域の人の交流も続いています。予測しがたい質問が出て学生が立ち往生した時、先輩が助け船を出してことなきを得たり、又、住民が当然と思っている事が彼らの違った視点からの意見に「なるほど」と納得、街について改めて考え直すきっかけになることもあります。

中学生にはクラブ活動の延長として参加してもらいます。吹奏楽部がタイガースの法被を着て「六甲^{おろし}嵐」を演奏し、大拍手でアンコール。眩しい太陽の下、懸命に演技するバトン部員には惜しめない応援で励まします。和太鼓サークルはその迫力に圧倒されます。中学生が地域の人の前に出る事で、マスコミに取り上げられている残念な姿の若者ではなく、普段着姿を実感してもらえます。



小学生も先生と一緒に「よさこいソーラン」で参加、見ている大人達が一緒に踊りたくなりました。

年を重ねるたびに参加者が増加しています。2日間で延べ250人以上の人たちが集まってワイワイガヤガヤと楽しみました。ビンゴゲーム、子どもの宝探し、大忙しのスタッフ達と、とても楽しい時間を過ごします。

運営は？

来訪者はテーブルにある貯金箱に「お気持ち料 (100円)」を入れます。全て「お気持ち料」で運営しています。スタッフは個人ボランティアで、一切組織を経由していません。カレンダーに参加可能な日時を記入して皆にわかるようにします。カレンダーがスタッフの名前で埋まっています。誰もいない時は？などといった心配は「街角」にはないのです。当番が自然に決まってしまうのが、現実なのです。スタッフが手薄な時は来訪者がスタッフに変身。「お手伝いする事ありますか」と申し出てくれます。老若男女の区別なく運営は万全と自負しています。

「住んで良かった、これからも住み続けたい東町」が私達の地域での合い言葉です。

